

「図書館」がもたらしたものの・・・

立命館アジア太平洋大学 4 回生
原 悠祐

1. はじめに

「図書館」の果たす役割とは・・・この問いこそが、私と本研修とを出会わせてくれたものであった。在学する立命館アジア太平洋大学においてライブラリースタッフとして勤務している私にとって、「図書館」はとても身近な存在であり、大学での勉強には欠くことのできない大切な場所でもあった。仕事をする中では、特に意識して「図書館」の役割などを考える機会はなかったが、共に働く留学生メンバーとの議論の中で、「図書館」と呼べるような施設が存在していない国の状況や、“「図書館」との出会いがあったことで勉強してこられた“について知ることとなった。生まれた時から「図書館」が存在する環境で育った私にとっては、「図書館」はあってあたりまえの存在であったため、「図書館」の存在しない社会・・・というものを考えることは難しかった。そんなときであった SVA の海外研修プログラムに出会ったのは、「図書館支援活動」の実態を知ることができるチャンスだと思い、すぐに応募を決めた。

その準備段階でのリサーチ¹で、以下のような、開発途上国における「図書館支援活動」の全体像をつかむことができた。

開発支援の文脈において、図書館は、情報の提供、読書の普及、生涯教育の場としての機能を果たすことが期待されてきている。²特に、ノンフォーマル教育の文脈では、「ダカール行動枠組み」³で掲げる識字率の改善や道徳教育の普及に関する目標に資する社会的施設であるとも言われている。また、国際図書館連盟 (IFLA) でも図書館の社会的責任に関するディスカッション・グループが立ち上げられ、開発途上国と先進国との間の情報格差を縮小し、地理的、民族的、経済的に不利な立場にある開発途上国の人々の生活を改善するために、国際支援活動を強化することが検討されている。⁴このような取り組みから、開発途上国で図書館活動を支援することは、開発途上国の人々の情報アクセス環境の改善や教育することにつながるため、その重要性が叫ばれてきたといえる。しかしながら、多くの発展途上国では、インフラ整備や教育・保健衛生といった事業が優先され、図書館整備に関する事業は後回しにされがちという現状がある

¹ 主な文献として、北野康子(2006)「カンボジアの図書館事情と日本の支援」アジ研ワールド・トレンド No.126, 竹内比呂也(2006)「開発、知識、そして図書館—開発途上国における図書館の機能を考える」アジ研ワールド・トレンド No.126, 竹内比呂也(2001)「図書館における国際協力—発展途上国への開発支援を中心に—」『21 世紀の図書館と図書館員』日本図書館情報学会研究委員会編集, 福田郁代(1995)「日本の開発途上国に対する図書館援助」図書館界

² 青柳英治(2006)「特集—開発途上国における図書館の役割と支援活動」アジ研ワールド・トレンド No.126, p.2

³ ダカール行動計画に関しては、以下の website を参照。

http://www.unesco.org/education/efa/ed_for_all/dakfram_eng.shtml(最終閲覧日 2009 年 4 月 3 日)

⁴ Kagan, Alfred, The Growing Gap between the Information Rich and the Poor Both within Countries and between Countries: A Composite Policy Paper, IFLA Journal, Vol.26, No.1,200

では、カンボジアのケースではどうであろうか？これを明らかにすることが私の大きな目的であった。調査にあたっては、本当に多くのスタッフの方々に協力していただいた。インタビューの翻訳から、私のわがままな要求(調査内容等に関する)にも積極的にアドバイスしていただき、さらには地方でのモニタリングなどのチャンスも多く与えてくださり、自分の調査の視野を広げることができたこと、そして素敵な出会いができたことに関して、この場をお借りして厚く御礼申し上げたいと思います。本当にありがとうございました。

それでは、私が行ったカンボジアにおける図書館整備の現状を調査ならびに、カンボジアにおける図書館の機能／役割についての考察を読んでいただければと思います。このレポートを通じて、カンボジアにおける図書館支援活動がより充実していけることを切に願うとともに、私自身も、今後も支援活動の可能性を探っていければと考えています。

※なお今回の調査では、以下のような手法を用いて調査を実施させていただいた。

【調査方法】

○学術的研究：

- －カンボジアを含む開発途上国における図書館支援活動に関する先行研究に関する調査
- －カンボジア政府や図書館支援活動にかかわる NGO による調査報告書

○インタビュー形式による調査：

- －カンボジアにおいて図書館で勤務されている方へのインタビュー
- －カンボジア政府担当者、子どもの教育にかかわる国連機関(UNICEF)でのインタビュー
(主なアンケート内容に関しては、Appendix I を参照。)
- －国際協力関係者(NGO、JICA 等)へのインタビュー

○質問回答による調査：

- －SVA が共催した「Storytelling Contest」におけるカンボジア 11 州の学校図書館スタッフ(計 64 名)を対象としたアンケート形式の調査。(Appendix II を参照。)

2. カンボジアにおける図書館の現状

2006 年の国立国会図書館の記事⁵によると、カンボジアには、政府機関の図書館が 28 館、大学図書館が 13 館、学校図書館が 1 千以上あり、地方には、インターネットにアクセスできるコミュニティ情報センターが 22 か所ある。また、50 以上の中小の専門図書館・私立図書館や、NGO や国連の組織が運営する図書館もある。

今回は、より具体的なカンボジアにおける図書館の現状を把握するため、カンボジア国立図書館館長であり、カンボジア図書館協会の会長も務められている Khlot Vibolla さんにインタ

⁵ Country Report Template(For CDNLAO Meeting on 26 March 2006)

ビューを行った。ここでは、その内容をもとに、カンボジアにおける図書館を大きく 4 つに分類してまとめていく。

①**公共図書館**—Vibolla さんによれば、“公共”というものに厳密な定義はなく、誰もが自由に利用できる図書館のことを指す。プノンペン市内にあるカンボジア国立図書館が代表的である。

カンボジア国立図書館⁶は、1924 年にフランス植民地政府により公文書館の一部として開設され、当初の蔵書数は、2879 冊で、フランス語の資料が大部分を占めていた。1953 年の独立後、クメール語の資料が出版されるようになったことで、図書館の蔵書数も増加した。しかし、1975 年～1979 年にかけてのクメール・ルージュによる支配と内戦によって、図書館は閉鎖に追い込まれた。クメール・ルージュ時代の図書館は、軍隊の施設として利用され、多くの資料が、炊事用の燃料やトイレトーパー等に利用されたと言われている。その結果、資料全体の約 60%が失われた。その後、1980 年代には、ソ連やベトナムによる支援やアメリカのコーネル大などの支援を受けて、図書館の再建作業が進められた。⁷そしてようやく 2004 年に週末を除き国民に公開されるようになった。現在蔵書数は 11 万冊程度とされ、フランス語、クメール語、英語などの資料が所蔵されている。国立図書館の資料は 1)Patrimoine Collection(Old French Collection)、2)Cambodiana Collection、3)Reference Collection(百科事典や辞書)、4)General Collection(寄贈による資料)、5) Lending Collection(貸出可能資料)という 5 種類に分けられている。特に 1)と 2)の資料は、カンボジアの歴史を知る上で希少価値が高いとされている。1)Patrimoine Collection には、1924—1953 年間のフランス統治時代の資料や 19、20 世紀に出版された多くのフランス語書籍などが保存されている。また 2) Cambodiana Collection には、520 種類のシュロの葉(palm leaf)に書かれた文書資料やポル・ポト政権下で難を逃れたクメール語の資料などが保存されている。(一部資料は、マイクロフィルム化する作業が進められている)

また図書館スタッフ数は、現在 23 名で、1591 名が利用者登録されている。利用頻度は日によってバラつきがあり、多い時は 1 日 100 人以上が利用するが、少ない日は 20 人程度である。⁸現在では、ユネスコが無償で提供している図書館システム“WINISIS”を利用した資料の貸出⁹や、オンラインでの蔵書検索システム整備も進められている。さらに 2007—2009 年にかけては、ANZ Royal の支援の下、主に大学生を対象とした IT Program 講座も土曜日に開講している。しかしでは、専門教育を受けた図書館員の不足や資金不足などで、全国の図書館とのネットワーク整備などの国立図書館として役割を果たせない状況にある。

②大学図書館

⁶ http://www.slais.ubc.ca/COURSES/libr500/2000-2001-wt1/www/l_kelley/cambodia.htm
参照。(最終閲覧日：2009 年 3 月 25 日)

⁷ 北野康子「カンボジアの図書館事情と日本の支援」p.26

⁸ 私が取材をさせていただいた際にも(3 月 10 日)、利用者登録をされる方々が数名来られていた。図書館長によれば、年々利用者登録数は上昇傾向にあるとのこと。

⁹ 国立国会図書館「CDNLAO 2007 カントリーレポート(1)オーストラリア、カンボジア」参照。
<http://current.ndl.go.jp/e713> (最終閲覧日：2009 年 3 月 22 日)

カンボジアにおける大学図書館は、大学ごとによってかなり事情が異なる。ここでは、最も図書館整備が進んでいる大学図書館である、王立プノンペン大学フンセン図書館長の Pou Vanny 氏のインタビューをもとにカンボジアにおける大学図書館事情をまとめる。

王立プノンペン大学は、1960年にシハヌーク国王によって設立され、カンボジア最大規模である。同大学のフンセン図書館は、1997年にヨーロッパ諸国、アメリカや日本の支援を受けて、フンセン首相の尽力によって建設された。

蔵書数は、6万冊を超えており、現在14人のフルタイムスタッフ（23人のパートタイムスタッフ）で運営され、日々600人程度の利用があるという。カンボジア最大の大学の図書館であるが、大学生のみならず、一般の利用者も利用できる点が特徴であると言える。また第2図書館建設や新入生への大学図書館利用セミナーの実施など、図書館のサービス強化にも力を入れている。しかしインタビューを通じて、図書館の設備に関して、様々な問題を抱えていることも浮き彫りになった。以下に主なものを3点挙げる。

A. 予算(資金)の不足

大学図書館は、大学における研究をサポートする重要な機能をもつため、もっと多くの資料を確保したいと考えているが、資金不足のために実現できていないという。王立大学ではあるが、政府からの支援が得られるわけでもなく、また大学の予算の中でも図書館に割り当てられるのはごく一部であるようだ。そのため、図書購入や雑誌購読の恒常的予算が組めず、もっぱら資料は、Asia Foundationなどの支援団体の寄贈に頼っている。それゆえの弊害であるが、最新の資料はほとんどなく、最新のものでも2003年出版というような状況にあり、大学教育において、資金不足は致命的な問題であるといえる。

B. 技術不足

大学図書館の資料は、OPAC(Online Public Access Catalogue)とよばれる蔵書検索システムでパソコンを利用して検索できるようになっている。しかし、システムがうまく検索できない場合や、まだすべての蔵書が検索できるような環境にはなっていない。また、③で述べる問題とも関連してくるが、「OPACを利用して書籍を検索してみたが、システム上表示された閲覧棚に書籍がない」という状況もたびたび起きている状況である。

C. 「図書館」に関する理解不足

この「図書館」に関する理解不足は大きな問題である。その背景には、図書館業務に関する研修を受けたフルタイムのスタッフを確保することが難しい現状がある。現状では、カンボジアには図書館業務について学べる環境はなく、多くのスタッフが海外で研修を積んでいるようだ。そのため、②で述べたような“蔵書検索ができて、資料を手に入れることができない”というケースが生まれてしまうのだという。その原因の1つとして、図書館員に「請求記号」の意味が完全に理解されていないことがあげられるようだ。¹⁰具体的に言えば、フンセン図書

¹⁰ JICA シニアボランティアとして、フンセン図書館に勤務されている藤井寛子さんによれば、統一した図書館員マニュアルがないことが大きな問題であり、海外からのスタッフが現在図書館員の勤務サポートや資料のデータベース化などの作業を行っている。

館の場合は”デューイ十進分類法“(Dewey Decimal Classification :DDC)に基づいて、すべての図書を 000-900 に分類し、社会科学の分野は”300-399 番台”というように学問領域によってカテゴリー分けがされている。しかし図書館員が、排架作業(資料を棚にならべる作業)の段階で、きちんと「請求記号」に従って排架することができていないことがあるそうだ。

図書館の運営における“図書館員”の重要性を改めて感じるとともに、国家レベルで、図書館員を養成する環境が早く整備されるように願っている。

③ 学校図書館

ここでの「学校図書館」とは、主に小学校(中学校)でのものを指し、後述する図書館支援活動によって、様々な形で建設・運営が進められている。

カンボジア教育・青年・スポーツ省(Ministry of Education, Youth and Sport: MoEYS)(以下,MoEYS と記す)による統計¹¹によれば、カンボジア全土に 2842 個の学校図書館があるとされ、内訳は、都心部に 489、地方に 2248、遠隔地では 105 となっている。

私が行った 11 州を対象とした調査では、学校図書館の形態として、主に(独立型)図書館、図書室、図書箱、その他の 4 種類があり、結果は以下の通りであった。(学校によっては、複数の図書館形態を持つ所もあった。)

州／図書館の形態	図書館(独立型)	図書室	図書箱	その他
Banteay Meanchey	5	1		
Battambang	3	2		1
Kampong Chhnang	5	1		
Kampong Thom	4	2	1	
Kamport	2	2	2	
Kandal	6			
Phnom Penh	5			
Pursat	5	1		
Siem Reap	6			
Svay Rieng	5	1		
Takeo	5	4	3	3

④ NGO 運営による図書館¹²

カンボジアには NGO が運営している図書館と呼ばれるようなものが多い。日本のものでは、カンボジア日本協力センター (Cambodia-Japan Cooperation Center :CJCC) や日本国

¹¹ Education Statistic & Indicators 2007 / 2008

¹² 本内容は、CCC の Rotha さん、OPEN BOOK スタッフへのインタビューに基づいて作成。

際ボランティアセンター(Japan Volunteer Center: JVC)などが図書館を開放している。
ここでは、私が実際に訪問した 2 つの図書館を紹介する。

Cooperation Committee for Cambodia(CCC) : CCC とは、カンボジアで活動する NGO 間の協力促進のために設立されたネットワークで、本図書館には農業、教育、環境、人権、保健衛生など様々な分野の 7000 冊以上の資料が所蔵されており、会員になれば貸出サービスも利用できる。図書館スタッフの Eng Rotha さんによれば、蔵書の大部分は Asia Foundation の寄贈によるもので、国立図書館やフンセン図書館とも資料管理の面で協力関係にあるようだ。

OPEN BOOK: OPEN BOOK とは、“読書の楽しみ”を多くの人々に伝えることを目的に、2002 年に設置された読書室(Reading-room)である。2004 年から NGO によって運営されている。重主に子供向けの絵本が多く、クメール語の本が 250 冊以上、英語・フランス語など様々な言語の本が 800 冊ほどある(日本語の絵本もあった!!)。また、毎週木曜日には Storytelling(絵本の読み聞かせ)や Drawings(おえかき)の活動も、多くのボランティアに支えられて展開されている。

3. 図書館支援活動の実態

次に、カンボジアにおける図書館支援活動がどのように行われているのかについてまとめる。ここでは、カンボジアで図書館支援活動を展開する Room to Read、SIPAR、シャンティ国際ボランティアの主要 3 団体を対象として、それぞれの団体の活動をまとめるとともに、それらの活動の背景にどのような理由があるのか(どのような正当性に基づいて活動をしているか)について考察する。なお調査内容は、すべて各団体のスタッフへのインタビューによる。

① Room to Read¹³

1999 年 John Wood 氏によって創設された Room to Read は「2020 年までに 1000 万人の子供に、生涯の教育という贈り物(lifelong gift of education)を届けること」を目標に掲げ、2002 年からカンボジアで活動を開始した。活動内容は、1)二ヶ国語(クメール語・英語)図書館建設、2)クメール語による書籍出版、3)コンピューター&語学教室プログラム、4)女子奨学金プログラムの 4 つである。

◆プロジェクト概要：図書館事業(Reading Room Program)、図書出版／寄贈事業(Local Language Publishing Program)、図書館員研修事業
◆図書館事業スタッフ 6 名
◆対象エリア：Udon Meanchey, Preah Vihear, Siemreap, Kampong Thom, Kampong Cham
◆予算：\$460,000 - 2008 年度

Room to Read の図書館事業は、Mobile Reading Room(移動図書館)、Separate Reading Room(図書室整備)、Constructed Reading Room(図書館整備)の 3 つから構成され、2008 年までに 1105 の Reading room、2009 年にも 81 個の Reading room を整備する予定である。¹⁴ま

¹³ 本内容は、Room to Read スタッフの Bonalus さんへのインタビューと Room to Read Annual Report 2007 を基に作成した。

¹⁴ <http://www.roomtoread.org/countries/cambodia.html> (最終閲覧日：2009 年 3 月 31 日)

た、図書出版事業では 2008 年までに 69 タイトルを出版し、2 年ごとに若手の作家を対象としたコンテストを開催するなどして、クメール語での出版事業への支援に取り組んでいる。

Bonalus さんは、Room to Read の活動の特徴について「他の NGO(例えば、SIPAR や SVA) は、活動内容に“ノンフォーマル教育”の要素を含んでいるが、Room to Read は、初等教育における図書館事業にターゲットを絞っている」と説明された。また図書館の役割については、「図書館は、子供やその親に教育の必要性を伝えるための重要な手段である一方で、教師の能力向上にも効果があるが、まだまだ量的／質的に十分とはいえない。Room to Read として、7779 の学校¹⁵すべてに図書館を整備していきたい」と述べた。また「現在の学校図書館では、開館時間が 1 日 1,2 時間などと限定されているところも少なくなく、図書館が効果的に利用されていない」という問題点も指摘された。

② SIPAR (Soutie a l'Initiative Privee Pour l'Aide a la Reconstruction)¹⁶

フランス系の NGO 団体で、1982 年に設立。カンボジアでの活動は 1989 年からで、カンボジアにおける教育の質改善と識字率の向上のための識字環境整備を大きな目的としており、1) 初等教育における図書館ネットワークの整備、2) ノンフォーマル教育のための教育センター整備、3) カンボジアでの出版事業支援の 3 つのプロジェクトを実施している。

- ◆プロジェクト概要：学校図書館(図書館員研修)、ノンフォーマル教育、クメール語図書の出版
- ◆図書館事業スタッフ 35 名
- ◆対象エリア：24 州すべて(2009 年度は、特に Koh Kong, Kampong Thom, Rattanakiri and Kandal に重点を置く。)
- ◆予算：\$ 294000 - 2008 年度

SIPAR は、当初(1989-1995 年)は、4 州(kampong Speu, Prey Veng, Kampong Chhnang と Kandal)における初等学校の環境整備や教員トレーニングを行っていたが、1996 年以降、「教育の質改善に、初等教育における“読書の文化(reading culture) “の定着が不可欠である」として、“Reading development”活動を展開し、2004 年までに 8 州¹⁷に 90 の学校図書館を整備、2005 年からは活動範囲をカンボジア全土に広げ、現在およそ 180 箇所図書館支援活動を展開している。また、クメール語図書の出版事業に関しては、2008 年度には 40 タイトル以上の本が出版され、内容もカンボジアに伝わる民話や「星の王子さま」のような世界の名著、そして他国の昔話(例えば、日本の「一寸法師」)など様々である。

Chhoenug Chhenghak さんは「カンボジア政府の教育方針として、すべての学校に図書館を設置することが目標とされているが、実際のところ、物質的(図書などの資料)、財政的、技術的な支援が不足しているために、設置したくてもできないという現状を、特に地方の学校では抱

¹⁵ Education Statistics & Indicator 2006/2007 (Ministry of Education, Youth and Sports)

¹⁶ 本内容は、SIPAR スタッフの Chhoenug Chhenghak さんへのインタビューと SIPAR の活動を紹介してある“Reading development in Cambodia- from a pilot action to a national policy”を基に作成した。

¹⁷ Kampong Speu, Prey Veng, Kampong Chhnang, Kandal, Phnom Penh, Kampong Cham, Svay Rieng, Kratie の 8 州

えている。そのギャップを埋めるために、NGO は政府と学校の間でのコーディネーターとしての役割がより一層求められるだろう」と話した。

③ シャンティ国際ボランティア(Shanti Volunteer Association)¹⁸

シャンティ国際ボランティアは、カンボジア難民救済事業の一環として、移動図書館／カンボジア語による図書印刷活動を始めた「曹洞宗東南アジア難民救済会議(1980)」「曹洞宗ボランティア会(1981)」の活動を引き継いでいる。カンボジアにおいては、1991年にプノンペン事務所が開設され、図書館事業は1993年から開始された。活動方針として、“教育文化復興”を掲げ、「おはなしを中心とした図書館活動」¹⁹が図書館事業の柱となっている。

◆プロジェクト概要：図書館整備事業、絵本／紙芝居の印刷、出版、移動図書館事業、各種ワークショップの開催、Storytelling Contest の開催
◆図書館事業スタッフ：8名
◆対象エリア：Phnom Penh, Kandal, Battambang, Takeo, Svay Rieng, Kamport, Kampong Chhnang, Pursat, Banteay Meanchey, Siemreap, Kampong Thom
◆予算：約1億2200万円 -2008年度 ²⁰

シャンティ国際ボランティアの図書館事業は、①本の供与、②図書館員への研修・支援、③施設・機材の支援の3つに大きく分けられる。以下に簡単にまとめる。

①本の供与は「図書の出版」と「絵本を届ける運動」という2種類の方法で行われている。「図書の出版」は、カンボジアにおける図書出版の普及率の低さを背景に、クメール語の絵本、紙芝居や子供向けの本の出版活動を展開し、2007年には、カンボジア語の絵本(7タイトル、21000冊)と紙芝居(3タイトル、1050冊)を配布した。また「絵本を届ける運動」²¹は、日本語あるいは英語で出版された絵本にクメール語の訳文を貼り付けるという手法で、日本の学生や企業、ボランティアの方々の協力によって、2007年には絵本と紙芝居等26948冊を配布した。

②図書館員への研修・支援活動においては、カンボジア教育・青年・スポーツ省との協力の下、図書館員や教員を対象とした「おはなしと図書館活動に関する研修会」を開催している。研修会では、A)カンボジアにおける図書館と民話の歴史、B)図書館員の仕事と運営の仕方、C)すばなしや絵本・紙芝居を使ったおはなしの仕方と実践、D)謄写版、E)おはなしのための教材作り²²といった内容が扱われている。また、2007年7月からの「JICA 草の根パートナー型事業—カンボジアにおける小学校図書館活動普及のための人材育成事業」では、従来の研修内容に加えて、統一した図書館員の研修マニュアルの作成や図書館活動を普及させる図書館トレーナーの育成など、図書館活動の管理運営という点に重点が置かれている。

¹⁸ 本内容は、SVA 図書館事業スタッフへのインタビューを基に作成した。

¹⁹ SVA 編「教育と開発 リサーチペーパーNo.4: SVA の図書館事業 その成果とモデル形成」p.41

²⁰ 「SVA—2007年度年次報告／2008年度活動計画」参照。

²¹ 絵本を届ける運動とは、

²² SVA 編「教育と開発 リサーチペーパーNo.4: SVA の図書館事業 その成果とモデル形成」p.43

また、カンボジア教育・青年・スポーツ省や JICA(国際協力機構)の支援・協力の下、1年に1度「Storytelling Contest」が開催され、2009年は11州から66人が参加し、図書館員たちの「読み聞かせ」の技能を競う機会が設けられている。この機会を通じて、図書館員たちは、他地域のスタッフとの交流を深めながら、図書館運営の向上につなげている。

③施設・機材の支援は、通常図書や図書棚を贈与する形で行われているが、学校建設事業と連携して、図書館の建物の建設支援も実施している。

また、図書館や本のない地域(スラム)や学校に、図書を運んで読み聞かせなどの活動を行う「移動図書館」活動も展開され、2007年は計121回実施され、23543人の子供たちが参加した。²³

図書館スタッフを対象としたワークショップについては、図書館員、教師、学校関係者にどのように図書館を効率的に活用していけるかに考えてもらう機会を与えることを目的とされている。おりがみなどを使った図書館活動の指導や、ストーリーテリングの方法、絵本や図書の配布なども実施している。

【考察—図書館支援活動をめぐる現状】

これまで主に3つのNGOによって、カンボジアの学校図書館支援活動が進められてきたことを紹介したが、私は調査を通じて、①そのような図書館支援活動が進められている背景に、どのような考えがあるのか、②またカンボジアにおける図書館支援は、どの程度重要視されているのだろうか、③カンボジア政府側は、外部の図書館支援をどのように見ているのかという3点に関心をいだいた。そこで以下では、カンボジア教育・青年・スポーツ省の Sina Sany さん²⁴へのインタビューをもとに、A)カンボジアにおける(学校)図書館の位置付け、B)図書館支援活動の課題について考察を行わせていただく。なお、ここでの考察は、上記に挙げた3点に関する調査ができた範囲内でのものであることをお断りさせていただきたい。

A) カンボジアにおける(学校)図書館の位置づけ

カンボジア憲法²⁵では、教育の重要性が書かれているが、教育制度が完全に整備されていない状況下において、学校に行けていない大人、学校に行けていない子どもたちにとって、Community Library(学校図書館で地域に開放している図書館)の果たす役割は、教育の観点から考えて大きく、図書館が教育開発において重要な役割を担うと考えられている。そのため、

²³ SVA「2007年度年次報告／2008年度活動計画」p.8

²⁴ Sanyさんは、「Chief of Library and Teaching material Section」として働かれている。

²⁵ カンボジア憲法65条：国家は、すべての教育段階において、市民の教育を受ける権利を保護し、向上させ、すべての市民に教育が普及するよう、必要な措置を講じる。国家は、クメール市民の福祉のために、体育及びスポーツを尊重する。

カンボジア憲法66条：国家は、市民が生計を立てるための均等な機会を得ることを保障する教育の自由及び均等の原則を実現することを目的にして、全国における包括的且つ一定の基準に合致する教育制度を確立する。

カンボジア教育・青年・スポーツ省は、教育開発の一環として「図書館活動」を捉え、2つの軸で UNICEF などの国際機関や図書館支援活動を展開する NGO と協力して、政策を実行している。2つの軸とは、①Education for All(万人²⁶のための教育)の実現と②Child Friendly Schools における目標達成である。図書館支援が、これらの2つの教育目標の実現に役割を果たしうるという考え方にに基づき、カンボジアでは図書館支援事業が実施されているといえる。以下では、2つの政策概念を簡単に紹介する。

① Education for All (EFA)－万人のための教育

2000年の「世界教育フォーラム(World Education Forum: WEF)」²⁷において、採択された「ダカール行動のための枠組み(The Dakar Framework for Action, Education for All : Meeting our Collective Commitments)」²⁸に基づき、カンボジア政府は、EFAの目標実現のための6つのワーキンググループを設置した。

- (1) 幼児のケアと教育(Early Childhood Care and Education)
- (2) 初等教育(Primary Education)
- (3) すべての若者と大人に関するライフスキル(Life Skills of All Young and Adults)
- (4) 若者と大人の識字率(Literacy for Youth and Adults)
- (5) 教育におけるジェンダー格差の解消(Eliminating Gender Disparities in Basic Education)
- (6) よりよい生活のための教育の質改善(Improving the Quality of Education for Better Life)

さらに、カンボジア政府は、教育戦略(Education Strategic Plan: ESP)を作成し、国連ミレニアム開発目標²⁹の中で掲げられている、教育目標の達成に向けた取り組みも進められている。

Education for All(EFA)－万人のための教育とは？

この“Education for All”の基本理念は「小さな子供から大人も含めたあらゆる人々（女性や少数民族その他の不利な立場にある人々も含めて）に対して、（拡大された広い概念での）基礎教育を保証する」³⁰ことであるとされている。この考え方は、1990年3月にタイのジョムティエンで開催された「万民のための教育世界会議(World Conference on Education for All: WCEFA)」³¹で採択された『万人のための教育世界宣言(World Declaration on Education for

²⁶ UNESCO は、「万人」の定義を「幼児、学齢時から青年、成人まであらゆる年齢層を含む人々」であるとしている。

²⁷会議には、164カ国、NGO も含めて1100人を超える人々が参加した。

²⁸ http://www.unesco.org/education/efa/ed_for_all/dakfram_eng.shtml (最終閲覧日：2009年3月27日)

²⁹ ミレニアム開発目標のうち、以下の2つが教育関連の目標とされている。ターゲット③：2015年までに、全ての子どもが男女の区別なく初等教育の全課程を修了できるようにする。ターゲット④：可能な限り2005年までに、初等・中等教育における男女格差を解消し、2015年までに全ての教育レベルにおける男女格差を解消する。

³⁰小川啓一、江連誠、武寛子「万人のための教育(EFA)への挑戦：日本のODAに対する提言」独立行政法人国際協力機構 国際協力総合研究所 2005

³¹ 会議には、UNESCO、UNICEF、UNDP、世界銀行の4国際機関と155カ国政府、33政府機関、125のNGO団体が参加した。(詳しくは、前掲書を参照)

All)』の中で提唱された。その後、UNESCO、UNICEF、UNDP、世界銀行が中心となり「万人のための教育諮問フォーラム(International Consultative Forum on Education for All)(通称 EFA フォーラム)」が結成され、EFA 実現に向けた議論が重ねられた。そして、2000 年 4 月、セネガルのダカールで開催された「世界教育フォーラム(World Education Forum: WEF)」³²において、「ダカール行動のための枠組み(The Dakar Framework for Action, Education for All : Meeting our Collective Commitments)」が採択された。内容は、改めて「万人のための教育世界宣言」の考え方を再確認し、「教育は基本的人権であり、持続可能な開発や平和そして国家間・内の安定のためのカギである。さらに、急速なグローバル化の流れが見られる 21 世紀の社会・経済への効果的な参加のための不可欠の手段でもある。EFA の目標達成は、もはや延期されるべきではない」と述べている。

「ダカール行動のための枠組み」の内容は以下の通りである。³³

- ① 最も恵まれない子供達に特に配慮を行った総合的な就学前保育・教育の拡大及び改善を図ること。
- ② 女子や困難な環境下にある子供達、少数民族出身の子供達に対し特別な配慮を払いつつ、2015 年までに全ての子供達が、無償で質の高い義務教育へのアクセスを持ち、修学を完了できるようにすること。
- ③ 全ての青年及び成人の学習ニーズが、適切な学習プログラム及び生活技能プログラムへの公平なアクセスを通じて満たされるようにすること。
- ④ 2015 年までに成人（特に女性の）識字率の 50 パーセント改善を達成すること。また、全ての成人が基礎教育及び継続教育に対する公正なアクセスを達成すること。
- ⑤ 2005 年までに初等及び中等教育における男女格差を解消すること。2015 年までに教育における男女の平等を達成すること。この過程において、女子の質の良い基礎教育への充分かつ平等なアクセス及び修学の達成について特段の配慮を払うこと。
- ⑥ 特に読み書き能力、計算能力、及び基本となる生活技能の面で、確認ができかつ測定可能な成果の達成が可能となるよう、教育の全ての局面における質の改善並びに卓越性を確保すること。

EFA の目標実現の取り組みとして、2002 年からファスト・トラック・イニシアティブ (Fast Track Initiative: FTI) と呼ばれる、「2015 年までの初等教育の完全普及 (UPC: Universal Primary Completion)」を実現するために、低所得国において不足する資金、能力、データ整備、政策の

³²会議には、164 カ国、NGO も含めて 1100 人を超える人々が参加した。

³³ <http://www.mext.go.jp/unesco/004/003.htm> (最終閲覧日：2009 年 3 月 27 日)

4つのギャップを埋めることを目的とした、低所得国と先進ドナー国・機関との国際的な支援枠組みが作られた。カンボジアでも、初等教育のアクセスと質の向上の目的のために、全国の651校の不完全校へ教材供与(百万ドル、図書、教材の供与)、ワークショップの計画が2009年に開始されるそうだが、具体的な計画はまだ明確ではないと思われる。

② Child Friendly Schools Program

Child Friendly Schools Program とは？

上記挙げた Education for All の目標や、国連ミレニアム開発目標などの達成を目指すために、子どもの教育水準を向上させるための取り組みの 1 つ。プログラムの理念として「A child Friendly school nurtures a school-friendly child, support children for development and a school-friendly community」が掲げられている。³⁴

具体的には、Child Friendly Schools は以下の 6 つの dimension から構成されている。

- ① すべての子どもたちに学校教育を提供
- ② 効果的な学習
- ③ 子どもの健康、安全、保護
- ④ ジェンダー対策（男女の教育格差の是正）
- ⑤ ローカル学校における子ども、家族、コミュニティの参加
- ⑥ 国家教育システムによる支援・協力

この中で、“School Libraries”は、②の効果的な学習に関する中核的な活動と位置付けられている。具体的には、Child Friendly Schools Program 内に「図書館活動作業部会(Library Activities Working Group)」が設置され、カンボジアのすべての小学校(クラスター制度での中心校/衛星校を含む)に図書館を設置することを最終目標に活動が進められている。Sany さんによれば、「図書館の設置によって、子どもたちが“本を読む”ということ学ぶこと、また自ら学ぶ機会を創出することができるようになるため、学校での学習においても、良い効果をもたらさうのではないかと考えている。

しかしながら現在のところ具体的な活動内容、またどの程度図書館事業に予算がつくのかということは決まっていない。Child Friendly Schools 事業の実施計画書(Child Friendly Schools Master Plan)では、2009年-2010年にかけて“School Libraries” program が展開されることとなっているが、現時点(2009年3月)では未定であるという。^{35,36}

³⁴ Kingdom of Cambodia, Ministry of Education, Youth and Sports (2007), *Child Friendly School Policy*, p.4

³⁵ Child Friendly Schools Master Plan によれば、2009年-2010年にかけて、特に以下の充実した支援を受けられている次の地域での事業が計画されている。(Kg Thom, Kg Speu, Prey Veng, Svay Rieng, Stung Treng, Otdar Meanchey, Kg Cham, Kg Chhnang, Phnom Penh,

B) 図書館支援活動の課題

上記で述べた 2 つの国家レベルの政策との整合性を図りながら展開されている図書館支援事業であるが、現在の事業における課題についても明らかになった。以下では、Sany さんのコメントを参考にまとめる。

① 限定された支援活動

NGO(特に、SVA、Sipar、Room to Read)などの活動によって、図書館の建設は進んでいるが、カンボジアの 24 州のうち、NGO が関わっていないところでは、まだまだ図書館支援がほとんどないのが現状である。Sany さんによれば、Preah Vihear 州においては、州全体で 1 つの図書館しかないような状況であるようだ。先ほど紹介した 3 つの NGO の活動対象地域を見ても、プノンペンを中心とした地域、あるいはトンレサップ湖周辺の地域での活動が顕著であり、一般的に遠隔地と呼ばれる、Pailin 州、Ratanak Kiri 州、Mondul Kiri 州などの地域ではほとんど支援活動は実施されていない。MoEYS による調査によっても、遠隔地での図書館の整備状況は低く、Ratanak Kiri 州(19)と Siemreap 州(190)を比較した場合、図書館数には 10 倍の違いが見られる。³⁷

MoEYS としては、NGO に支援活動の拡大を提案・要請しているが、NGO の活動にも限界があり、Child Friendly School Program における目標のように、支援事業をカンボジア全土に展開するにはできていない。図書館支援の地域間ギャップをいかにして克服していくかが大きな課題であるといえる。

② Librarian の養成／待遇改善

図書館の建設を進めたとしても、図書館員が効果的なプログラムを展開しなければ、図書館の役割は果たせない。MoEYS として、NGO など協力しながら、人材資源としての Librarian 養成にもっと力を入れる必要があると考えている。(まだまだカンボジア全土には展開できていない) そのために、訓練を受けることで、図書を配布するといった形で、Librarian が参加しやすい環境整備にも力を入れているとのことである。

しかし、Librarian の待遇に関してはいまだ大きな問題があるといえる。それは、Librarian も教員と同様に、午前・午後の 2 部制で勤務するが、給料は一部分しか払われないという現状である。この理由としては、給料設定を管理している Ministry of Finance が、未だに「図書館員はあまり働かない」という従来の考え方³⁸を持っているゆえの問題であるという。そのた

Preah Vihear, Pursat and Siem Reap)

³⁶ Child Friendly Schools 事業を政府と共同で進めている UNICEF の担当官へのインタビューでも、具体的な内容は定かではないとのことであった。

³⁷ MoEYS. Education Statistics & Indicators 2007/2008 p.29

³⁸ Sany さんによれば、現在では、図書館支援事業が展開されたことによって、Librarian が、「いかに図書館を利用者にとって魅力的なものにするか」という課題に、Librarian Training などを通じて向き合うようになったことで、Librarian とは、「教育を受けた、能力のある人材」であるといった考え方が広まりつつあるという。

め、図書館員によっては、午前／午後と働いても、片方分の給料しか払われないために、午前働いて、午後は働かず、図書館を閉めてしまうというケースも少なくないという。(私の訪問した学校でも、学校によっては図書館が閉まっているケースもあった。) また給料額も、月に約40-45\$程度で、これはカンボジアでは低所得層にあたりとされ、**Librarian** の置かれている状況は厳しい。**MoEYS** は、こういった問題に対して具体的な改善策を講じることは今のところできていないが、**Ministry of Finance** と協議を重ね、**Librarian** の現状の仕事内容を正しく理解してもらうとともに、待遇改善への努力をしていくそうである。

4. カンボジアでの“図書館”が担う役割と現場での課題

これまでカンボジアでの図書館支援における取り組みと課題について述べてきたが、ここでは、アンケート調査をもとに、現役の **Librarian** が考える「カンボジア(学校)図書館の役割／機能と課題」についてまとめる。当初私は、研修準備段階でカンボジアの図書館には以下の2つの機能を果たしうるのではないかと考え、この点についての調査を実施しようと計画していた。

- ① クメール語を母語に持つ人々にとっては、クメール文化・言語などの継承の場となりうるのではないか？
- ② ポル・ポト時代の記憶をいかに後世に伝えるのか？
(図書館の持つアーカイブズとしての役割を持ち得ないか)？

調査準備を進める中で、②の項目に関する質問は、現在のカンボジアの現状を踏まえると調査することが難しいのではないかとというアドバイスを受け、実際の調査では①の項目のみを扱った。この調査結果は後述するが、ここでは、現役の学校図書館スタッフを対象に行った調査－①「学校図書館の役割」、②「図書館活動の与える影響」、③「文化継承の場としての図書館」に関する調査結果と考察についてまとめ、最後にアンケートで指摘された、学校図書館運営の現場における課題について述べる。

*カンボジアにおける学校図書館の役割

アンケート調査での「カンボジアにおける学校図書館の役割」についての回答は以下のようであった。

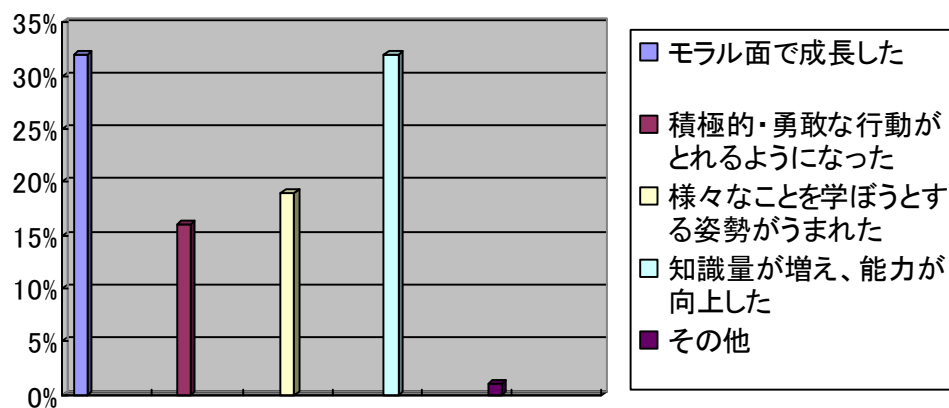
- －知識を提供する場
- －クメール文化・言語を保存する場
- －学校教育を促進する場 (識字率向上に貢献)
- －教育を促進する場
- －コミュニティでの役割

アーカイブズとしての役割

調査では、図書館には子供たちの小学校(初等教育)における勉強を促進する効果や、子供たちの生活態度や言葉づかいなどにもよい効果を与えているとの指摘があった。まだまだ教育環境が十分とはいえない状況のカンボジアにおいて、読書を通じた知識の習得や、図書館資料を使った学習という、教育面での(学校)図書館が果たしうる役割は大きいといえる。教育面での(学校)図書館が与える効果について、Librarian がどのように考えているのかについても調査したところ、以下のような結果が出た。

*図書館活動の影響

【問：図書館活動は子供たちにどのような影響を与えているか？】



調査結果から、図書館活動が「モラル面での成長(32%)」と「知識量の増加と能力の向上(32%)」に大きく貢献していることがわかる。「モラル面」については、「礼儀正しくなった」「年配の方を敬うようになった」「絵本を通じて道徳心／善悪の区別する能力が養われている」といったコメントがあった。「知識量の増加と能力の向上」に関しては、読書することによって様々な知識を習得し、それが子供たちの能力—特に、読む(reading)、書く(writing)、話す(speaking)、聞く(listening)という4つの能力の向上に貢献しているといわれている。また、子供たちが自由に図書に触れる機会が提供されている環境では、「子どもたちが読書を通じて、あるいは子供たち同士の読み聞かせなどを通じて、自発的な学びが生まれて」きている。実際に、私が訪問した図書館で見かけた少女が1冊の本を音読しながら、ノートに書き写す姿は、図書館活動がもたらす教育面での可能性を実際を感じさせてくれた。また、その他として「図書館の存在が学校の出席率の向上に貢献している」あるいは「図書館には、学校での授業を補完する役割がある」といったコメントも寄せられた。子供たちの図書館での楽しい経験が学校への登校を促し、また図書館に置かれている教材等を活用して子供たちが自主的に勉強する機会が生まれていることは、図書館活動がある程度正規の学校教育により影響を与えているということができよう。

また、図書が簡単に手に入らない農村部や遠隔地での学校図書館においては、積極的に地域開放がなされ、コミュニティの人々にも知識を提供する場としての役割を担っている。コミュ

ニティ図書館がいかなる効果をもたらさうのかについては、今回の調査から判断することは難しいが、教育機会に恵まれていない人々（特にスラム住民、農村貧困地域住民、少数民族など）に、教育の機会を与えるという「ノンフォーマル教育」につながる部分が多いのではないかと思う。加えて、両親が図書館を利用しながら教育の重要性を理解することも、子供の教育にもよい効果を与えるといえるであろう。

さらに Banteay Meanchey 州の回答では図書館の役割として「アーカイブズ」機能が指摘された。この回答者がどのような意味で“アーカイブズ”³⁹という言葉を使ったかは定かではないが、近年スマトラ大地震・大津波によるインドネシア・アチェのアーカイブズへの被害や、イラク戦争後のバグダッドにおけるアーカイブズの破壊などで、「アーカイブズ」への関心は国際的に高まりつつあるといえる。カンボジアも、ポル・ポト政権下の大虐殺をどう記憶し、どう後世に伝えていくのかという課題を抱えているが、財政難や人材不足などによって、まだまだアーカイブズの整備は進められていないのが現状であろう。⁴⁰しかしながら、現役の Librarian が「過去および現在の記憶を未来に伝える」というアーカイブズの機能を図書館が担うると述べられていた点に、私は感銘を受けるとともに、ポル・ポト時代の記憶の伝承に関して図書館が果たさうる可能性を垣間見ることができたように思う。

*文化継承の場としての図書館

私が当初考えていた「クメール語を母語に持つ人々にとっては、クメール文化・言語などの継承の場となりうるのではないか？」という質問に対して、調査の結果 98%の回答者が「そう思う」と答えた。理由としては、と「絵本や図書を通じてクメール文化・言語を学ぶことができるため」や「図書館には歴史的、文化的資料を収集・保存する役割がある」といった意見が挙げられた。言語権⁴¹—自己もしくは自己の属する言語集団が、使用したいと望む言語を使用して、社会生活を営むことを、誰からも妨げられない権利—の観点からも、クメール語の文化を守っていく重要性は高く、図書館支援活動で行われている「クメール語図書の出版事業」は、大きな貢献であるといえよう。長田が述べているように、カンボジアの図書館も「本は人を育てる文化にかかわり、情報は知識を分ける文化にかかわり、それを結びつけるのが図書館で、図書館は蓄える文化に関わる存在」⁴²としての役割を果たしつつあると感じた。そのために、図書館と子供たち(人々)をつなぐという大きな役割を果たす Librarian の存在は貴重であり、次に述べる Librarian が抱える課題を解決していくことが、カンボジアの図書館の機能をより高めることにつながるのではないかと思う。

³⁹ “アーカイブズ”の定義は諸説あるようだが、一般的には以下の3つの意味を有しているとされる。①現用価値を失った後も保存に値する歴史的文化的価値のある資料。②記録資料を行政・経営・学術・文化の参考資料または諸権利の裏づけのために保存する施設。③記録資料を収集・整理・保存・公開する文書館機能。(村井友子「開発途上国のアーカイブズ—記録を紡ぎ未来へ伝える」p.3 参照)

⁴⁰ 現在は Documentation Center of Cambodia などの団体を中心に、ポル・ポト政権下の残虐行為に関する調査・記録・資料保存などの活動が行われている。詳しくは、<http://www.dccam.org/Abouts/History/Histories.htm> 参照。(最終閲覧日：2009年3月20日)

⁴¹ 鈴木敏和(2000)『言語権の構造』成文堂 p.8

⁴² 長田弘(2006)『読書からはじめる』日本放送協会 8章参照

*カンボジアにおける図書館の課題

【問：どのようなスキルを今後身に付けたいか？】についての回答をもとに、Librarian が感じている課題について明らかにしていく。実際の調査では各自自由に書いてもらう形式を取ったため、様々な回答が寄せられたが、ここでは特に多かった意見と、注目に値する意見を中心にまとめる。

今後身に付けたいスキルとして「お絵かきや折り紙などの図書館活動に関するノウハウ」「効果的な Storytelling の方法」「図書館運営」といった意見が多数挙げられた。各 Librarian が、子供たちにとっての魅力的な図書館づくりを目指すため、各自のスキルアップが必要であると感じていることがわかった。「図書館運営」に関しては、蔵書の目録システムの整備や図書の貸し出しサービスの充実といった意見も述べられ、また Librarian として、自国の文化や歴史のみならず、諸外国に関する知識も身に付けたいという声も聞かれた。

その一方で、物質的・人的面における課題も明らかになった。物質的には、図書スペースの不足や図書の数不足(学校の生徒数と比較した場合かなり少ない)などの点が指摘された。前述したいように、図書館活動が教育予算にはっきりと組み込まれているわけではないので、予算的にも図書スペースの拡充や図書の購入は難しい現状がある。そのような状況において、Room to Read, SIPAR, SVA などの NGO が果たす役割は大きいですが、カンボジア教育・青年・スポーツ省の Sany さんが述べられていたように、現在の図書館支援事業が行われている地域は限定されており、調査の中でも、図書館支援事業の全土での展開を要望するコメントも寄せられた。人的な点でも、前述した Librarian の待遇の問題もあるが、カンボジアにおいて統一された Librarian 向けのトレーニングプログラム等が実施されているわけではない。調査でもこの点に関する指摘がされたが、地域間で格差が生まれないようにカンボジア全土で Librarian の養成に向けた制度づくりが求められていると感じた。

また、カンボジアでの NGO による図書館支援活動は、図書館が初等教育／ノンフォーマル教育双方の促進を目的としている場合が多いが、1つの(学校)図書館が2つの目的を果たせるほどの機能を持ちえているかについては疑問を感じた。初等教育は「初等教育の質の改善目的として、教員・教材の質を高めていくアプローチ」⁴³である一方、ノンフォーマル教育では「教育機会に恵まれていない人々に教育を受ける機会を作る」ことが目的であって、両者が対象とする領域は異なる。具体的には、図書館支援における「図書の選定」作業段階において、初等教育にふさわしい図書の内容と、様々な階層の対象に含むノンフォーマル教育向けの図書の内容とは異なり、それぞれ区別される必要があると考える。アンケート結果から、「図書館活動あるいは図書館という存在」が、ある程度の正規の学校教育にプラスの影響を与えることが明らかになった。その一方で、カンボジアの初等教育での内部効率性の低さという問題⁴⁴—進級率が低く、留年率や中退率が高い—という問題も指摘されている。前述した物質的・人的課題を抱えるカンボジアの現状では、「子どもの教育機会拡充」や「子どもの教育水準の向上」といった国家レベルの教育目標達成には、図書館活動と正規の学校教育との連携をより深めていくことが1つの鍵ではないかと感じた。その際の懸念事項としては、図書館活動と正規の学校教育とを同じものさしではかることができるだろうか、というものである。私が感じたアイデアと

⁴³ SVA 編『教育と開発 リサーチペーパーNo.4: SVA の図書館事業 その成果とモデル形成』p.8

⁴⁴ 平山雄大(2007)「カンボジアにおける初等教育の現状と課題—教育の量の確保及び質の向上に着目して—」早稲田大学大学院教育学研究所紀要 別冊 15(1) pp.221-223

しては、図書館活動というものをより正規の学校教育とリンクさせて、子ども一人ひとりが学校教育を通じて、図書館という存在について知り、学んでいける環境を作っていくということである。そのためには、やはりより細かなレベルで図書館活動が学校教育にあたる効果に関する調査・研究を進めることであると思う。子ども自身や両親・教師などの認識レベルにとどまらず、上記のカンボジアの教育事情を改善するツールとしての図書館活動の可能性を探るということも今後の課題になるのではと感じている。

5. 最後に—the lifelong gift⁴⁵としての図書館

これまでカンボジアにおける図書館の現状、図書館支援活動の実態や学校図書館の持つ役割／機能、そして課題についてまとめてきたが、私がこの研修を通じて一番強く感じたことは、「図書館」という存在のありがたさである。日本に暮らしている私にとって、何気なく日々利用している図書館という存在が、カンボジアの多くの子どもたち(人々)にとって、“ ”

また、自分自身が大学で **Library Assistant** として勤務していることとも関係しているが、様々なタイプの図書館を調べていくなかで、図書館員の持つ役割の大きさを実感した。学校図書館の例をとれば、図書館員の熱意、スキルやアイデアによって、図書館活動はより充実させていくことができることを感じる事ができた。その一方で、大学図書館員の研修制度が不十分であるために、効果的な図書館サービスを提供できていない現状も知ることとなった。図書館の持つ力は本当に活かすのは司書なのだから、そういう司書の力というものを再認識させられた。

研修後、自分の大学図書館の司書や学生スタッフと、「図書館」あるいは「図書」を通じた国際協力の可能性や、教育における「図書館」の有用性についても議論を行った。その中で、アフリカ出身の学生が、自身の経験から「図書館」を学校教育とどう関連づけさせていくかが課題なのでは・・・という指摘をもらい、改めて「図書館」というアクターが教育開発においてどのような役割を果たしうるのかについての関心が深まったように思う。

また、日本などの図書館とカンボジアの図書館の共通する点について、

- ・図書館には読書を通じて人を育てる力があるということ。
- ・つなぐ力（司書が介在して本と利用者をつなぐ力）—知識を過去から現在、未来へとつないでいく場なのでは・・・

といった意見がだされ、自分自身ハッとさせられた。表面的にみれば、図書の量やサービスの質といった点で大きな違いのある両国の図書館も、本質的には同じであるということ。そして、その本質的な部分を守りながら、それぞれの国の文化や価値観、また用途(目的)というスパイスが加えられて、「図書館」というものが存在しうるのだということを実感することができた。今回の経験を生かし、自分のできる形での「図書館活動」を継続し、カンボジアの学校図書館がどのように発展を遂げていくのか見守っていきたいと思う。

⁴⁵ John Wood (2008) *Leaving Microsoft to Change the World*, HarperCollins Publisher

Appendix I : インタビュー内容(①MoEYS、②UNICEF)

<①MoEYS>

*Confirmation: Can it be said that the policy of Education for All, namely Non-Formal Education embraces the policy of Child Friendly Schools in terms of promoting the access to education?

As the Government of Cambodia has worked together with assistance from the international community to achieve Non-Formal Education goals by 2015, which includes the equal access to quality basic schooling for all children,

1. What does MoEYS think the role / function of library in promoting the non-formal education program?

The Library Activities Working Group of MoEYS has been initiated under the Child Friendly School Program with cooperation of SVA and JICA,

2. What are the vision and activity of the Library Activities working group under Child Friendly School program?

3. What do you (or the members of Library Working Group) think the role of the library under Child Friend School program?

According to the Master Plan of Child Friendly Schools, it is mentioned that the budget for Child Friendly School by 2007-2008 to 2010-2-11 is 10068042\$,

4. How much proportion of the budget concerning the library program in the total budget for Child Friendly School?

As you can see the page 11 of Mater plan of CFS, the program of School Libraries is included as CFS core Activities in 2009-2010,

5. What the specific plan of “School Libraries Program in 2009-2010 which mentions under Child Friendly School program?

Through my experience in this internship like Storytelling Contest or, visiting the library in rural area, I really feel the importance of the ability of librarian and of the training for

the librarian,

6. What do you think what kind of project concerning the library is primarily needed?

If you have information regarding the next question, please let me know.

7. Is there any program concerning the library, except Child Friendly School?

<②UNICEF>

• Personal profile @ UNICEF

• CFS Program

—How does UNICEF coordinate with MoEYS to promote the policy of Child Friendly School?

—the foundation of the Activities

— UNICEF's recognition: the relationship between library and promotion of Child education

—What do you or does UNICEF think the role of the library under Child Friend School program?

As you can see the page 11 of Mater plan of CFS, the program of School Libraries is included as CFS core Activities in 2009-2010,

—What the specific plan of “School Libraries Program in 2009-2010 which mentions under Child Friendly School program?

According to the Master Plan of Child Friendly Schools, it is mentioned that the budget for Child Friendly School by 2007-2008 to 2010-2-11 is 10068042\$,

—How much proportion of the budget concerning the library program in the total budget for Child Friendly School?

Appendix II: 学校図書館員対象のアンケート用紙

I'm Yusuke Hara, now doing an internship in Shanti Volunteer Association. Through this internship, I would like to study the function of library in Cambodia and international

